

國學院大學學術情報リポジトリ

Astronomical Knowledge in Squid Fishing on Sado Island in Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nakano, Makibi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000656

佐渡のイカ釣り漁撈における天文民俗

中野真備

はじめに

今日、農耕や漁撈など、自然環境を利用する生業において、機械を利用しない地域はほとんどみられない。機械は生業の生産性や効率性を高め、また人間の身体のみでは獲得し得ない情報を容易に提供することを可能にした。たとえば漁撈においては、GPS (Global Positioning System : 全球測位システム) や魚群探知機のような位置を特定するための機械や全自動巻き上げ機のような労働力に代わる機械など、目的・用途に応じて

様々な機会が導入されている。本稿で対象としているイカ釣り漁撈は、一般に太陽の沈む黄昏頃から釣り始め、イカの走光性を利用した漁を夜通しおこなうという特徴がある。そのため、自船や魚群の位置を特定する機械や労働力に代わる機械のほかに、集魚灯として光源となる機械もひろく用いられてきた。これは、篝火から石油灯、ガス灯、そして電球へと変化してきた。さまざまに機器利用が進んだ現代社会では、それまで人びとが経験したり伝聞したりして獲得・蓄積してきた自然環境についての知識が、非科学的なもの、後進的なものと見なされることもある。実際に、市町村史誌の項目においても、自然環境に

ついでに知識が「俗信」や「迷信」として編纂されることはめ
ずらしくない。本稿で対象とする天文の民俗も「俗信」や「迷
信」として編纂されることの多い分野のひとつである。人びと
が伝承してきたことがらを「俗信」ではなく「知識」とする考
えかたは、柳田國男（一九三五）をはじめとし、民俗学や人類
学の分野でも度々取り上げられてきた（柳田 一九三五、渡邊
一九九〇）。

生業における自然環境の知識や技術については、これまで少
なからぬ研究者が、その重要性を示してきた。ここでは、生業
の当事者の知識を扱うことよって、人びとが自然環境をどの
ように認識し、解釈し、利用してきたのかということが、まさ
に内側から分析されてきた。知識とは、民俗文化の基層を成す
ものであり、自然環境の知識を分析することは、自然とともに
生きる人間の文化を内側から描き出す試みでもあった。

このように生業における自然環境の知識を扱うことの重要性
があるなかで、天体の知識を扱うことには、加えてイカ釣り漁
撈の現況における知識としての重要性がある。そもそも海と天
体は、密接な関係にある。たとえば海棲生物の産卵等の行動は、
天体の動きと関連するものが多いことが指摘されてきた（秋道
一九九五）。漁撈についていえば、漁師たちは漁に適した季節

や時刻を知るために、天体や潮汐、風向などから必要な情報を
読みとつてきた。特に、新潟県佐渡島のイカ釣り漁撈は、日本
の代表的な漁撈のひとつとして池田哲夫（二〇〇四）によって
詳細に研究されているほか、漁具漁法研究としても注目されて
きた（長島 一九一〇、福島 一九七三、池田 二〇〇四、土井
二〇一四）。後で詳しく論じるが、佐渡のイカ釣り漁撈には、
釣獲の時間帯を星の出入りをみて見る点において、他地域の天
文民俗にはあまりみられない特徴がある（池田 二〇〇四）。

第二には、機器利用の利用が進む社会における知識対応につ
いての、指標としての重要性がある。漁業は、近代以降に機械
化が進み、現代ではさらに魚群探知機やGPSなど高度な機械
が導入され、在来の知識は減少する傾向にある。そもそも天文
にかんする日本の生活文化や習俗、すなわち天文民俗の研究の
蓄積は少なく（内田 一九七三）、生業の機械化前後の知識を
追うことのできる地域は極めて限定的である。しかし、本稿で
対象とする佐渡のイカ漁における天文知識については例外的
で、古いものでは後述の一九〇二（明治三十五）年生まれの漁
師の手記があり、加えて池田（二〇〇四）の現地調査に基づく
記録がある。これらの資料に、筆者が二〇一四年におこなった
現地調査の記録を加えることにより、機械化前後の漁師たちの

知識対応について数十年間の変化を明らかにすることができ
る。そこで本稿では、先行研究のある新潟県佐渡市姫津・稲鯨
のイカ釣り漁撈を対象とし、天文民俗の特徴とその変化を分析
するのである。

今日、生業における天文の民俗は、より高い性能をもつ機械
を導入しようとする技術改革と、それに伴う知識変容の過渡期
にある。いま、天文の民俗を記録し、分析することは、まさに
変容する過程にある知識を分析することである。これは、変化
しゆく社会のなかで、自然環境とともに生きる人びとの、自然
環境に対するまなざしや、それに基づく対応の変化を描き出す
ことを意味する。本稿は、佐渡のイカ釣り漁撈における天体知
の通時的な分析を通して、人間が自然をみる姿勢は生業の機械
化の影響をどのように受け、人びとが知識や理解のありかたを
どのように変容させ、対応したのかを考察する。

一、「知識」と「機械」

人間が自然を利用するさい、道具や知識が必要となる。篠原
徹は「道具（機械）と身体知と自然知の総和」として「技術」
を定義している〔篠原 二〇〇五 一八九〕。

ここでいう「身体知」とは、「経験的に獲得された身体を使う
技法」〔篠原 二〇〇五 一八九〕であり、「自然知」とは、野
生植物や魚介類の同定や、利用にかなする知識など、「採取か
ら口に入るまでの一連の長い過程にともなう利用に関する知
識」〔篠原 二〇〇五 一九三〕をいう。道具は、身体知や自
然知と結びつくことで初めて機能する。篠原は、前者の結びつ
きを「身体的技能」、後者の結びつきを「生態的技能」と呼ん
でいる。つまり、「技術」とは、身体的技能と生態的技能の総和
である〔篠原 二〇〇五 一九五〕と言いかえることもできる。

他方、「在来知」という語がある。「在来知 (Indigenous
Knowledge)」とは、「伝統的」な共同体が、科学知やグロー
バルな知識とは別に使用、継承している集合的な知識 (Ellen
二〇〇〇、四〇五) であり、近年ではその個別性や可変性に着
目する動きもある〔杉山 二〇一一〕。留意すべきことは、「在
来知」の可変性は、人びとのかかわる自然や社会環境との関係
を調整して、形成・継承されてきたということである。たとえ
ば、漁撈に従事する人びとのかかわる環境は、海洋の温暖化現
象や埋め立てなど自然環境の変化に加え、産業技術の発展にと
もなう道具（機械）の変化など社会環境の変化にも対応しなが
ら、形成・継承されてきた。

本稿で対象とする天体知とは、漁具（道具・機械）と結びつく「自然知」のひとつであり、「身体知」でもある。他方、これらは一時代的なものや不変的なものではなく、漁具や漁法とともに変化しつづける「在来知」でもあると位置づけられる。日本における、星や月などの天体にかんする知識、つまり天体知には、古代に成立する国家による累積と、民間の生活の中で累積・継承されてきた知識がある。このような天体知のうち、本稿が着目するのは後者であり、特に漁撈を営む人びとの知識である。

二、天文民俗学の系譜と課題

天文現象に関する国内外の人類学的研究における概念や解釈、視座については、後藤〔二〇一四 一六五―一七八〕に詳しい。日本国内での天文学への文化的関心は和名研究からはじまったが、国外の研究動向としては、一九八〇年代以降に天文現象の考古学が盛んになった〔後藤 二〇一四 一六四〕。天文現象を扱う人文・社会科学における分野名称について、後藤は「天文に関する考古学と民族学の知見を切り離さずトータルに扱う分野を天文人類学 (astronomical anthropology)」と呼ぶ

べきではないかと考える」としている〔後藤 二〇一二 二十五―三十一〕。ラグルスらは文化天文学という用語を用いたが、天文人類学の先駆けとなる研究をしており、その分析では、(一) 通文化的比較 (crosscultural comparisons)、(二) 天文学との文化的相関 (cultural correlates for astronomy)、(三) 天文学に対する文化的反応 (cultural response to astronomy) の三つを学問の役割として示している [Rugles 一九九三]。

日本の例に当てはめれば、(一) 天文学との文化的相関は、陰陽寮や天文方といった国家の天文学を通して、政権と天文学が密接につながっていたことなどが挙げられる。陰陽寮や天文方は、中国の陰陽思想を受け継いでおり、地球上に観測できる天体の運行や現象は、ちょうど鏡のように地上での天帝や権力者たちの政治の動きを表しているという思想が前提となっている〔林 二〇〇六〕。日本の律令制国家機構に導入された陰陽思想は、江戸時代まで国家的次元で天文学の担い手として陰陽寮や天文方に継承された。陰陽寮や天文方は、朝廷や将軍の政治方針を左右する国家政治だけでなく、曆業とも密接にかかわっていた。また、(二) 天文学に対する文化的反応としては、天体の運行や異常などに対する予測や儀礼などの文化的対応がある。これには、日食や月食、流星、彗星の発生にともなう民間伝承も含ま

れる〔中野 二〇一六〕。

加えて、日本の天文民俗研究では、和名伝承に坎する蓄積がある。もともと自然科学的側面の強かった天文分野に文化的関心が向けられたのは、日本国内では方言研究がはじまりであった。

野尻抱影は一九二六年に初めて星の和名の聞き書きをおこなった。これ以降、野尻の求めに応じて全国各地で星の和名蒐集がおこなわれ星名辞典が編まれた〔野尻 一九七三〕。現地調査の報告を提供した研究者たちもそれぞれに星の方言についてまとめ、このうち内田武志による『星の方言と民俗』（内田 一九七三）と野尻による『日本星名辞典』は、共に星の和名研究の代表的文献となっている。しかし、これらは和名研究を中心としているため、日常生活や生業における星の役割は付属情報として記される程度であった。

星の方言研究以降、天文学を文化的側面から捉えたものに古天文学がある。東京天文台の暦計算室に属していた小川清彦らは、天文学における数式計算を駆使して、日本の歴史的文書における暦記事と実際の天体現象との関係を検証し、その先駆けとなった〔齊藤 一九九七〕。

このように数式計算を用いて天文の古記録を分析しようとする

る古天文学が興った一方で、人びとが日常的に暮らすなかで利用する知識を対象とする天文民俗学的報告も、一部の研究者によってなされるようになった。しかし依然として、天文民俗学への関心は高いとはいえない。その一因には、天文の民俗は、太平洋の海洋民のような優れた航海技術をもつ人びとにしかみられないと見なされてきたこともある。実際には、日本国内の漁民のみならず農民も、それぞれの生活に即した天文の民俗があったにもかかわらず、これらは多くの研究者によって見過ごされてきたのである。

このような背景にある現在の天文民俗学が抱える課題を、次に述べる。

第一には、社会的・文化的意味づけの議論の不足が挙げられる。すでに述べたように、星の和名研究のなかでも日常生活や生業における星の役割については付属的に記述されることはあった。その他にも、事例的に天文の知識が報告されることが、なかったわけではない。しかしそのいづれも、事例の報告に留まり、知識の変容や衰退、その社会的・文化的背景などについて議論されることはほとんどなかったといっている。

第二には、在来の知としての関心の不足である。地誌編纂事業において、民俗分野で星、特に生活のなかで利用されてきた

星の質間が含まれることは稀であったと考えられる。第一に述べたように、特定の事例について考察を深め、議論をすることが重要である一方、天文にかんする伝承知識とその利用についての事例の蓄積やアーカイブ構築によって、はじめて地域性や年代差の分析が可能になる。

本稿では、特に第一に挙げた研究の停滞性を脱することを見据えている。

三、イカ釣り漁撈にみられる天文民俗

イカ漁の出漁時間として、一般に太陽が出ている間は釣れないとされるため、太陽の沈む黄昏頃から釣り始め、夜通し漁をする。特に、佐渡ではナトキとよばれる日没前後の薄明り時間帯(状況)や、ハマジラミとよばれる日の出直前の夜が白む頃が、イカが海面近くに浮上するため多獲のタイミングであるという。ほかに、イカの漁況は月齢と密接に関係しているという報告もある〔池田 二〇〇四〕。多獲のタイミングを知るために漁師たちが利用したのが、月や星などの天体であった。こうした例は全国的にもみられ、イカ漁との関係の深い星の和名が記録されている。

特にイカ漁で利用されることの多い天体をヤクボシ(役星)とよぶ事例は、全国各地でみられる。ヤクはホシノデ(星が出現すること、またその時間帯)やホシノイリ(星が沈んで見えなくなること、またその時間帯)のほか、時刻を知らせる役割を指す。ホシには、太陽周期とほぼ一致して季節ごとに動く恒星・星団・星雲・星座だけでなく、独自の公転周期に従うたみ季節とは必ずしも一致しない惑星も含まれる。なお天体としては、ツキノデ(月が出現すること、またその時間帯)やツキノイリ(月が見えなくなること、またその時間帯)として月も関係する。

表一には、佐渡を除く全国のイカ漁で利用される天体とその利用方法を示した。内田(一九七三)および北尾(二〇一〇など)の記録には十三種類が確認された。このうちホシノデが大半を占めたことは、単に調査においてホシノデについての聞き取りがされた可能性もあるし、ホシノイリしか用いない地域も実は存在する可能性もあるが、現時点では検証できていない。なお後述の通り、佐渡においてはホシノデとともにホシノイリも一般的に用いられている〔池田 二〇〇四〕。また、ツキノデ・ツキノイリを利用する例もある。ホシを利用するかツキを利用するかは区別はごく近い距離の集落間ですでに異なっており、

表一 全国のイカ漁で利用される天体

略符・バイエル名など	星座名(固有名称) [通名]	ホシノデ	ホシノイリ ^{***}	その他
M45*	プレアデス星団 [スバル]	○	×	○
α Tau	おうし座 α 星 (Aldebaran)	○	×	×
α Tau・Caldwell41*	おうし座 α 星・ヒアデス星団	○	×	×
γ Ori・ ϵ Ori・ ζ Ori	オリオン座 γ 星 (Mintaka)・ ϵ 星 (Alnilam)・ ζ 星 (Alnitak) [オリオン座三ツ星]	○	×	×
γ Ori・ ϵ Ori・ ζ Ori・ M43・M42・ ι Ori	オリオン座 γ 星・ ϵ 星・ ζ 星およびM43星雲・ オリオン座大星雲・ ι 星 (Hatysa) [オリオン座小三ツ星]	○	×	△
M43・M42・ ι Ori・ η Ori	M42星雲・オリオン座大星雲・ オリオン座 ι 星・ η 星	○	×	○
α Aur	ぎょしゃ座 α 星 (Capella)	△	×	×
α PsA	みなみのうお座 α 星 (Formalhaut)	×	×	×
α Ari	おつじ座 α 星 (Hamal)	×	×	×
α CMa	おおいぬ座 α 星 (Sirius)	○	△	○
Venus**	金星 (Venus) [明けの明星]	○	×	○
	金星 (Venus) [宵の明星]	×	×	×
α UMa、 β UMa、 γ UMa、 δ UMa、 ϵ UMa、 ζ UMa、 η UMa	おおぐま座 α 星 (Dubhe)・ β 星 (Merak)・ γ 星 (Phecda)・ δ 星 (Megrez)・ ϵ 星 (Alioth)・ ζ 星 (Mizar)・ η 星 (Alkaid) [北斗七星]	×	×	○

北尾 (2010、2011、2012、2013、2014、2015、2016、2017)、内田 (1973)、より筆者作成
佐渡市の事例は除外し、表3に記載した。

表中の○は事例あり、△は情報不足のため判断不可、×は事例なし、とした。

*M=メシエ番号、Caldwell=カルドウェル番号

**惑星のため番号なし

***同定できないホシの例が島根県隠岐郡海士町で一例確認された。

「夕方、日が落ちるころ漁場へ行く。イカが夜一ゆうて宵の一番だけんな(日没直後に釣れるイカ)。それから夜中に来るのは星出とか月出という。星の入るのと月の入るのがある。それから朝一ゆうて朝の四時ころ大星が出るわね。これが朝一だ。」[池田 二〇〇四]

隠岐島のイカ釣具は江戸時代末期に佐渡で伝習してきた隠岐島の漁師によって伝えられたものとされ [日本学士院日本科学史刊行会 一九五九]、さらに隠岐島の漁師によって韓国の東海岸へ技術移動された [池田 二〇〇四] とあり、技術と共に天体知識が伝播した可能性もある。

地域差の有無は現在のところ不明である。

いずれにせよ、以上のようにイカ漁において天体は、特に多獲のタイミングを知るために用いられたほか、出漁中に時刻を知るためにも用いられていたことがわかる。

四、佐渡のイカ釣り漁撈

佐渡のイカ漁の主な対象はスルメイカである。スルメイカは、かつて佐渡の両津湾から内・外海府にかけて大量に獲れ、海辺の村ではスルメイカに対する経済的な依存度が大きかったという(池田 一九九〇)。スルメイカは、筋肉質の体に菱形の鰭を持ち、背中に暗黒色の縦縞のある、日本のイカを代表する種である。

佐渡のイカ釣漁具やその技術伝播の歴史については、池田〔一九九〇、二〇〇四〕に詳しく、本稿ではその概略を述べるに留める。イカは夜行性であるため、漁は夜間操業が一般的であり、スルメイカが明かりに集まる習性を利用した漁がおこなわれてきた。光源は、かつての篝火や焚き火など、船上で直接火を焚く方法から、現代の石油ランプ、ガス灯、電灯を用いる方法へと変化してきた〔池田 一九九〇〕。また、ソク、トンボ、ツノをはじめとする佐渡のイカ釣漁具は全国的にも優れ、日本の代表的な釣具として知られていた。池田はその理由について、イカ資源が豊富で、しかも経済的価値が高かったことから、その捕獲技術の高率化をめざした漁具や漁法の改良や考案が試みられたことを挙げている。さらに「近世には、佐渡金銀山の鉱山町相川の人口急増にもなつて、保存のきく動物性蛋白源として、スルメの需要が高くなつたことが考えられ、そのことも、佐渡のイカの捕獲技術を発達させた大きな要因となつたと思われる」としている〔池田 一九九〇〕。

こうした釣具による漁法に大きな変化がおとずれたのは、昭和三十三年頃に両津などの港湾地域からはじまった、GPSや魚群探知機などの機械の導入である。姫津港、稲鯨港でおこなつた聞き取り調査によれば、昭和三〇年代に両港で導入した

漁師は、ごくわずかであったという。その後、燃料が高騰すると集魚灯を使った漁業は困難になり、今日の両港では大掛かりなイカ漁は減少傾向にある。

イカ漁において天体知は、夜間操業のなかでもより多獲となるタイミングを知るために利用されてきたことはすでに述べたとおりである。今日、イカ漁が夜間操業であることは同様であるが、効率的に漁をおこなうために、多獲のタイミングを特定することよりも、イカの多くいる位置を正確に特定することに注力するほうが一般的である。そこで本稿では、イカの多くいる位置を正確に特定することに利用される、GPSや魚群探知機などの限定的な機械に焦点をあて、これらの発展を「機械化」「近代化」とし、佐渡においてイカ漁の機械化がはじまった昭和三〇年代以降を「近代化以降」とする。これにしたがい、現地調査にもとづく事例の話者を「近代化を経験した漁師」として便宜的に包括する。

五、新潟県佐渡市姫津・稲鯨地域におけるイカ釣り漁師の天体知の差異

筆者は、二〇一四年五月および八月に佐渡市姫津・稲鯨の両

地域において聞き取り調査をおこなった。両地域では、池田が稲鯨を含む佐渡の各地で現地調査をおこない、イカ釣漁師のライフヒストリーを紹介した〔池田 二〇〇四〕こともある。また、稲鯨地域では、同地域出身の漁師の手記（以下、I氏の手記）が保管されているこの手記には、天体とイカ漁の関係を含む、佐渡の漁撈にかんする様々なことがらが記され、『佐渡相川の歴史』にも収録された〔佐渡相川町史編纂委員会 一九八六〕。さらに、二〇二一年現在も星の和名の全国調査を続けている北尾は、一九七八年と二〇〇九年の二度にわたって姫津地域を訪れ、イカ漁で利用される星を記録した〔北尾 二〇〇二、二〇一〇〕。

I氏（屋号源吉）は、元治元年生まれの漁師の四男として明治三十五年稲鯨に生まれた。小学校卒業後すぐに漁師見習いとして別の船に雇われ、十六歳で漁師となり青森県下北半島に出稼ぎ漁に出た。I氏は漁業に関することや村のことを書き留めており、これが相川市史編纂にあたり調査をしていた地元教師の目に留まったことから、昭和五十九年頃にかけて改めて大学ノート一〇冊にまとめあげるに至った¹⁾。

以上の先行研究と筆者の調査から得られた八例を示す。このうち、先行研究にもとづく事例一から事例五は、明治生まれの話者によるものである。筆者による現地調査にもとづく事例六



写真1 事例六の漁師が利用する漁船に搭載された「機械」

特定することで多獲を狙う方法を採用している。写真1には、事例六の漁師が保有するイカ釣り漁船の船室風景を示す。ここにもみられるように、現在のイカ釣り漁船には、多くの「機械」が搭載されている。

(1) 先行研究・明治生まれの漁師の天体知

【事例一】明治三十八（一九〇五）年生、新潟県佐渡市相川町

から事例八は、昭和生まれの話者によるものであり、より詳しく見れば、その漁撈歴の大部分が、当該地域におけるイカ漁が「機械化」されて以降であるという特徴がある。事例六、七、八の漁師のいづれも、GPSおよび魚群探知機を使用して、イカの位置を

稲鯨出身、青森県下北半島風間浦村甲地区へ移住した話者〔池田 二〇〇四〕

「：イカは日暮時と朝方に一番よくついた。朝と宵が勝負だった。イカというものの習性はおかしいもので、月や星の関係でついたりつかなくなったりした。三角星とかスバルとか、スバルノアトボシだとかいろいろいるな星がある。そういうヤクボシになれば必ずイカがつく。はあ三角星が出るとトンボをやっているわけさ。闇になれば磯へ行つて寝たものさ。闇になるとイカがつかねえといわれとつたから。月があがると行つて捕つたものだ。：」

【事例二】明治三十五（一九〇二）年生、新潟県佐渡市稲鯨出身の漁師（I氏の手記…源吉覚書2 混合話）

「先に先生に、星とイカの、話したが、なぜ星の出月の出考えて、イカが、くうかは、きいていませんが、所に、より違う所は松ヶ崎方面は山が高く、海岸が深い、千メータも海岸から沖に出ると、二〇〇メータもの、水深になる所で例えば六つら星の出る時に、一面イカ取る、錨揚げて又少し陸の方へ、船お、入れると、六つら星が山が高いし、山にかくれるのだ。山から、又一面六つらの、出る星の出、イカ取り星の出二面見たものだ

と、話して、きかせた事も、忘れません。」

【事例三】明治三十五（一九〇二）年生、新潟県佐渡市稲鯨出身の漁師（I氏の手記…源吉覚書4 俗信解説）
「もつら星ほかについて」
マイカト星の關係に述べて見よう 星の出るは、（もつら星）

此の星は我町の、山の上から出る、形地はズ（図1）のように、並んで六ツつながる形地だし昔の人がもつらと、よんだのではないかと考える。一ツからかぞえると、一二三四五六になると、むとがそえるしたぶん、六おもとして、もつらの出と、名おつ

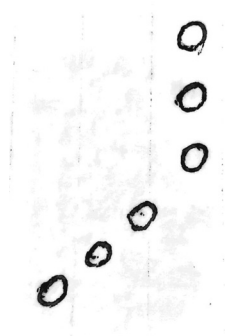


図1 イカ漁で利用される「もつら」のスケッチ（I氏の手記より）

けたと考えるより、ほかないし、星の伝説も、きい事が無い。六つらの、後星は一ツだが、星として、大きいし、又他の星と比べて、光もある。もつらの後星の出るのは、六ツ

並んで山から、全部出て次に出てくるが、一時間半位、遅れて出る。出る星は、もつらと、もつらの後ほし其他夜明けのミヨジヨオー此の星は、光る大きい星で、この星と、そのほかにあがる星はない。六つらは、何時頃にアガルカトとされると、季節によりて、あかる時間がちがう。六月七月頃は、日が暮れて、八時九時頃に登る。八月九月頃になると、もつらの出るのが次第におそくなります。九月には十一時頃に出るようになる。月々おくれる。夜明けのみよし星は七月頃と、十月頃も、あまりさがない。一月に一時間ほどおそくあがるだけで、よあけのミヨジヨウトゆうほどで、あの星のあがるのが、たのしい。ねむたいし、よのあけるのお、つげる星だし、うれしがる。」

【事例四】明治三十五（一九〇二）年生、新潟県佐渡市稲鯨出身の漁師（I氏の手記・源吉覚書4 俗信解説）

「（星の入りについて）

星のいりと言ふ意味は、空に見えた星がらんらんにさがりて、のちに、海の中に消えて、見えぬ、ように、なる事、星のいりと言ふ事だ。（中略）晴天の暗夜に天の空の中に薄雲のように、長く西から東の方巾広く、一線一寸見ると、二線にも見える。あれお、天の川とよんでおる。其の、中に特別大き見える星だの

で、川中星と言ふのだ。此の星は空の中方あるし、六七月頃には、海岸へ、夜のあけるまでにさがらんし、夏頃には、川中星の入るイカは取れぬ。八月九月頃になると、海岸までさがる。その関係は、夜の短か長いでちがうのだ。おわかりしよう、星の入りは、後は大星のいり（しもたなはた）、（かみたなはた）とこれだけしか、星の入はありませんし、よく覚えて置きなさい。星の入り方の、順じよう、第一番いるのは大ぼし、二番めが（かみタナバタ）三番めはシモタナバタ、五番目は先川中、六番目が後川中ほしの順である。忘れてならぬぞ。よく覚える、漁師より、よくなる。此のほしも、夜の明ける時季の節によりてちがう。大星は一番先に海え消えるほしだ。六七月頃日暮れ六時七時に、大星の入りとなるが、八月九月頃九時頃に、ならぬと、入らん下タナバタ上タナバタ。此の星は、しもとかみと、空におる時見ると、五間も六間もはたかつて見えるが、天の空だし、何万キロ開いておるかわからん。六七月頃は、カミタナバタ星は、十時十一時とするか、八九月になるとすれに夜明け前でない、入りません。川中ほしわ、又おそい。七月頃は、よがあけてもはるか天の空にいる、先川中の入りの、イカ取る頃は、九月十月頃でない、と取れぬし、よく自覚して下ささい。先川中の入りと、後川中入りとの間は、約二時間位いと考

えます。忘れておりましたが、月の出月の入りも、大切なほしの出入りと同じで、イカのおく見る方法の一つだ。漁師は星の出月の出は、大切な見る方法だし、何月頃にもつら星は何時頃あがると晴天の暗夜で時計で記録取りであるし雨の降る夜も曇りの夜も、時節考えて常に一匹も、くわんイカでも三匹五匹は必ずくうし、その時間には、起きてゆくほしの、いりも、その通りである」

【事例五】明治三十五（一九〇二）年生、新潟県佐渡市稲鯨出身の漁師（I氏の手記・源吉覚書4 俗信解説）

「（星月とイカについて）

さて星と月と、イカとのツナがり、これだけはわからん。なぜ星の出月の出、又は星の入りに常に一匹もくわんイカが、なぜ星月の出入りに考えてくうか、祖先代々から、私がこの訳けきいておらんし、おそらく、きいておる人はあるまえ、海水にいるイカがほし月が出る、入るのが季節により、出入りが変わるの、海の動物がわかるはずがない。人間さえ時間で見んとわからんのお、水中のイカが確実にわかるからふしぎだ。此のイカトほし月の出入りのつながりは今まできいた事はないし、私だけは、知らんとはつき答えます。此の事だけは他の漁師さんに

きいて研究してください。」

明治生まれの漁師の天体知の事例からは、①伝聞の知識であり、実際に利用している知識でもあること、②ホシの名称や位置、出現時間を詳細に記憶していること、③特定のホシ（役星Ⅱヤクボシ）をイカ漁と結びつけて認識していること、④イカとホシの関係について不思議に感じつつもイカ漁に利用していることの、4点が指摘できる。

つづいて、近代化を経験した漁師の天体知について、筆者の現地調査から得られた事例をもとに検討する。

(2) 現地調査…近代化を経験した漁師の天体知

【事例六】昭和二十三（一九四八）年生、新潟県佐渡市稲鯨出身在住の話者（二〇一四年五月五日、八月五日 佐渡市稲鯨にて筆者調査）

「満月のおおきいときは潮の満ち引きがある程度はやく、魚の採れ具合がちがう。ツキノイリ、ツキノデもあった。月が水平線に出入りすると、刺激があるのか魚のツキがいいという。親の時代には、ヤマアテは昼にやって、夜はツキノデ・ツキノイリ、ホシノデ・ホシノイリなどをみてやっていった。昔の漁師は

こういうことを親に聞いていた。ツキノデ・ツキノイリ、ホシノデ・ホシノイリについては、魚のツキがいいところにいるのも全く食わないのが、星や月が出入りするとなぜかバツと食いつく。やはりなにか刺激があるのだと思う。」

【事例七】昭和三十一年（一九五六年）年生、新潟県佐渡市姫津出身在住の話者（二〇一四年五月四日 佐渡市姫津にて筆者調査）
「星のあがるぞつてときにイカはよくとれる。そういうのは勘でわかる。最低一〇年はやらないといけない。いまは機械だから、年配の漁師が言ったのを聞いたくらいしか知らない。流れ星が流れる間に三回唱えると叶うというのはきいたことがある。昔は悪いことがあるとアヤガツイタといったが、流れ星があつてもそうだったかもしれない。」

【事例八】昭和三十五年（一九六〇年）年生、新潟県佐渡市姫津出身在住の話者（二〇一四年五月四日 佐渡市姫津にて筆者調査）
「手釣りのころは、ホシノデ、ホシノイリをみてやっていた。シリウスなんかだったと思う。月が出ていた方がイカがとれる。ヤミのときはとれない。月のことは、手釣りをやっているよそ

の船の者が言っていた。潮の名前はいくつもあるが、大潮と小潮は月の満ち欠けと関係している。」

近代化を経験した漁師の天体知の事例からは、①伝聞の知識であり、実際には利用していない、あるいは必須ではない知識であること、②ホシの名称の記憶や見分けはほとんどしていないこと、③特定の星をイカ漁と結びつけて認識していること、④イカとホシの関係について自然科学的な理由があると推察しているが、明らかではないこと、4点が指摘できる。

以上のように、明治生まれの漁師の天体知と、近代化を経験した漁師の知識には、一部共通した特徴がみられるものの、異なる点もみられた。天体知かつてイカ漁には必要不可欠であったにもかかわらず、なぜ近代化を経験した漁師は、明治生まれの漁師ほど詳細に認識しなくなったのだろうか。

六、漁撈の機械化に伴うイカ漁への知識対応

天文の知識に対する対応を具体的にみた前項の事例をみると、まず明治生まれの話者（事例一、二、五）は天体とイカの関係を不思議に思い、わからない、きいたことがない、と繰り返し返

しながらも、天体とイカには関係があることを確信している。

このように情報が不確実であるにもかかわらず、明治生まれの話者は非常に詳細に天体の知識を記し、実際のイカ漁にも利用している。このような行動は、伝聞した天体の知識について「理由はわからないが、こういう現象があればこう対応する」という「現象対応型」の理解によるといえる。

現象対応型の理解では、当時の知識や文化のなかで彼らなりの理由づけをすることがある。たとえば中世・近世の武家の日記や朝廷の記録をみると、まず天空の事象は地上の天子の動きや社会・政治の動きが鏡のように映し出されたものであると考えていることがうかがえる〔国史体系刊行会 一九三二、神田一九七八〕。中でも流星や彗星など、平時とは異なる天体事象が確認された場合、これを時の権力者の凶兆が天空に映し出されたという理解をし、実際の政治方針に影響を与えることもあった〔中野 二〇一六〕。

明治生まれの話者は、「海の動物がわかるはずがない」と自然科学的な理由を求めようとしているようにもみえる。しかし、結局その理由は見つからないまま、不確実な天体知を受け入れ、実際の漁に利用している。ここでは、当事者が理由に納得することよりも、知識を受容するかたちで対応し、実践することが

選択されるのである。

現象対応型の話者が、知識を漁撈に運用する事例をみてみると、たとえば事例一からは、月の見えかたによって、出漁するかどうかを判断していたことがうかがえる。また、事例四では、ヤクボシのひとつである「先川中」が沈むタイミングと、イカが多獲のタイミングを結びつけ、さらに「九月十月頃」が適しているという、実用的な知識を記録している。このように、明治生まれの漁師は、ヤクボシや月などが出没する時間に着目し、実際のイカ漁の時期を定めていたと考えられる。

一方、現地調査における昭和生まれの話者(事例六、七、八)は、すこし前の世代の他者の伝聞として天体知を語り、かつてのようには必須の漁撈技術のひとつとしては認識していない。これは、伝聞した天体の知識について「こういう理由や因果関係があればこうする」といった、当事者が納得することによる「因果対応型」の理解であるといえる。逆にいえば、伝聞した知識の理由が不明だった場合、その知識にしたがって行動することはないのである。

現象対応型に対して、因果対応型は、自然物の事象や現象について自然科学的な理由にもとづいて納得し、はじめて行動・実践するという点で、より現代的な姿勢であると言いかえるこ

とができる。このような自然物への見方が影響し、昭和生まれの話者が、たとえ年配者から天体知を伝聞したとしても、その理由が見出せず実際のイカ漁では利用しなかつたために、星を見分けて名称を記憶するには至らなかつたと考えられる。

因果対応型の話者における、知識の運用について検討する。彼らが「手釣りのころ」やその「親の世代」では、明治生まれの漁師による知識の運用と類似した方法であつたと推測される。しかし話者自身の経験としては、まず科学的に正確な機械を用いて漁撈をおこなうことが選択される。出漁した結果、多獲であつたときに、ホシノデ・ホシノイリの知識を想起しており、実際の体験に対する後付けといえる。したがって、明治生まれの話者のように、出漁に先立って知識を運用しているといえない。

近代化を経験した漁師は、かつての漁師ほど天体知を持っていないことを自覚しており、事例七の話者はその理由を「いまは機械だから」と説明する。ここでいう「機械」は、魚群探知機やGPSの導入を指す。これらの機械を使用する場合には、まずカレンダーをみて、季節変化を考慮しながら時計をみる。これにより、出漁時間の目安がつけられる。日没前後の薄明るい時間帯であるナトキと、日の出直前の夜が白む時間帯である

ハマジラミに漁をおこなうことができれば、あとは機械でイカの位置を特定すればよい。現代のイカ漁においては、より詳細な時間・タイミングを天体知によつて特定するよりも、出漁後にGPSや魚群探知機など、位置を特定する機械を利用するほうが効率的なのである。したがって、ホシノデ・ホシノイリによつて出漁時間を定める必要性自体が低いという背景がある。

他方で、体験へ知識を後付けするという行為は「近代化」した機械を利用する現代の漁撈のなかで、伝聞された知識を自分の経験に結びつけようとする姿勢ともいえる。このことは、「近代化」以降の漁師における経験的知識の累積化の様式といえることができる。また、さらなる調査が必要ではあるが、このように累積された知識が実際の漁撈においても補足的に運用されている可能性も指摘できる。

近代化前後で、イカ釣り漁師における天体知への対応が変容した一方で、共通して確認された知識もある。それは、ある特定のホシがイカ漁に関係しているという認識である。

佐渡のイカ漁で言及されることのある天体について示した表二では、ホシノデとともにホシノイリの事例も多く確認された。佐渡の漁師の手記だけでなく、筆者が二〇一四年におこなった現地調査においても、ホシノデ・ホシノイリともに認識されて

表二 佐渡のイカ漁で利用される天体

方名* (引用文献番号)	星座名等*	ホシノデ	ホシノイリ
ワボシ[1]	おひつじ座 α 星か[1]	○[1]	×
サキボシ[1]	ぎょしゃ座 α 星 (Capella) [1]	○[1]	×
スバル[1][2]、もつら星[1][3ab]	プレアデス星団[1]	○[1][2][3ab]	△[2]
ムツラ[2]	不明	○[2]	△[2]
アカボシ[1][2]	おうし座 α 星 (Aldebaran) [1] または金星か	○[1](△[2])	△[2]
ミツボシ[1][2]	おうし座 α 星[1]	△[1][2]	△[2]
カラスキ[1]	オリオン座三ツ星と小三ツ星[1]	○[1]	×
サンコウ[1]	オリオン座三ツ星[1]	○[1]	×
アトボシ[1]、シリウス[4]	おおいぬ座 α 星 (Sirius) [1]	○[1]	×
ホクサンボシ[1]	不明	△[1]	△[1]
フタツボシ[2]	不明	×	○[2]
オオボシ[2][3b]	不明	×	○[2][3b]
スバリのサキボシ[2]	不明	△[2]	△[2]
ヨアサのオオボシデ[2]	金星か	○[2]	△[2]
スバリノアト[2]	不明	△[2]	△[2]
ムツラノアト[2][3b]	不明	○[3b](△[2])	[2]
シロボシ[2]	不明	△[2]	△[2]
ヤマスバル[2]	不明	△[2]	△[2]
ヨアケノミョウジョウ[2][3b]	金星か	○[3b](△[2])	△[2]
三角星[2]	不明	○[2]	×
川中星[3b]	不明	×	○[3b]
タナバタ[2]	こと座またはわし座か	△[2]	△[2]
しもたなばた[3b]	わし座か	×	○[3b]
かみたなばた[3b]	こと座か	×	○[3b]
先川中[3b]	不明	×	○[3b]
後川中ほし[3b]	不明	×	○[3b]

[1]北尾 (2010)、[2]池田 (2004)、[3] I 氏の手記 (a: 源吉覚書 2 混合話、b: 源吉覚書 4 俗信解説)、[4]2014年 5 月 5 日佐渡市稲鯨にて筆者調査

表中の○は事例あり、△は情報不足のため判断不可、×は事例なし、とした。

*方名の分類は引用文献における分類に従い、明らかに同一と考えられる表記は一部省略した。佐渡における星の方言と推定には、内田 (1973) によった。実際の分類とは異なる可能性もあるが、本稿では事例として確認された方名を単に示すものとする。

いたことが確認された。本稿はこのようにホシノデ以外のヤクについて調査することの重要性についても指摘するものである。

おわりに

本稿は、佐渡のイカ釣り漁師が、天体知を認識・対応・運用する行為に着目して、そこに生業の機械化、近代化がどのような影響を与えたのかということ、現象対応型と因果対応型という二つの理解の形式に分類することで分析を試みた。

ある知識について、それまで調査者が聞き取ることができたが、時代を経て、同程度には聞き取られなくなると、これは知識の「喪失」とみなされることが多いだろう。実際に、生業における知識の研究では、「喪

「失」以降の知識のありかたを継続して対象とすることはほとんどみられなかった。しかし、そもそも在来の知識とは可変的なものであり、変わりゆく社会や自然環境との関係を調整しながら、形成されてきたのである〔杉山 二〇一〕。

今日のイカ漁において、はたして天体知は本当に「喪失」されたのだろうか。GPSや魚群探知機という「機械」がなかった時代・世代における天体伝承は、イカ漁において行動の方針を決定する主要な要素であり、必要不可欠な知識・技術であった。「機械化」以降、たしかにそれ以前と同様の天体知は形成・継承されなくなった。しかし、本稿で得られた事例は、現象対応型から因果対応型へと、理解の形式が変化していることを示してきた。「機械化」以降の時代・世代における天体伝承は、伝聞知を体験に紐付けて、自身の経験知として累積してゆくという事実があり、これらを補足的に運用している可能性も指摘してきた。これらは、ひとつの民俗文化の「喪失」ではない。むしろ、現代のGPSや魚群探知機を用いたイカ釣り漁においても、これらと並立あるいは連関させた自然知としての民俗文化があり、その継承あるいは創出とみることができよう。

このように天体知をとらえることではじめて、日本の天文民俗研究における現代の在来知としての分野を切り拓いていくこ

とができるのであり、本研究はその試論として示すものである。

謝辞

本稿は、筆者が二〇一七年に國學院大學文学部日本文学科に提出した卒業論文（指導教官・小川直之教授）に大幅に修正を加えたものである。現地調査にあたっては、新潟大学人文学部人文学科の池田哲夫教授（当時）にご助言をいただいた。

《注》

(1) I氏の手記の構成は以下の通り。()内は地元教師による表題、「」内はI氏による裏題である。便宜上、「一代記シリーズ」、「覚書シリーズ」、「解説」として分類した。ここでは手記の体裁の説明に続いて、本稿に特に関係のあると思われる内容のみ示した。それぞれの正確な執筆年月日は不明である。

一代記シリーズ

・裏題なし（源吉じいさん覚書 漁師一代記）表紙の表題は筆、内容は黒ボールペン、横書きA四版に縦書きで記述。

・栄蔵一代記其二 表題なし、内容は黒ボールペン、表紙の裏題は筆、KOKUYO横書き中野三〇枚A四版に縦書きで記述。

・栄蔵一代記その三 表題なし、表紙の裏題は筆、内容は黒ボールペン、KOKUYO横書き中野三〇枚A四版に縦書きで記述。南部イカ釣りの出稼ぎ。

・栄蔵一代記其四 表題なし、表紙の裏題は筆、内容は黒ボールペン、

Campus横書き四〇枚A四版に縦書きで記述。
覚書シリーズ

・裏題なし(源吉じいさん覚書 漁業雑話) 表紙の表題はボールペン、内容は黒ボールペン、Campus横書き四〇枚A四版に縦書きで記述。

・裏題なし(源吉覚書2 混合話) 表紙の裏題は筆、内容は黒ボールペン、KOKUYO横書き中野三〇枚A四版に縦書きで記述。イカ釣り・星の関係、親天望気、漁業諺。

・『稲鯨伝説』(源吉覚書3) 表紙の裏題は筆、表題はボールペン、内容は黒ボールペン、KOKUYO横書き中野三〇枚A四版に縦書きで記述。イカ漁船の集魚灯。

・裏題なし(源吉覚書4 俗信解説) 表紙の裏題は筆、内容は黒ボールペン、KOKUYO横書き四〇枚A四版に縦書きで記述。真イカ、イカ釣り漁具、真イカと星の関係。

・裏題なし(源吉覚書5 南部イカ釣り) 表紙の裏題は筆、内容は黒ボールペン、KOKUYO横書き四〇枚A四版に縦書きで記述。南部イカ釣り、漁船大型化と漁港整備に伴う環境の変化、その後の出稼ぎの南部イカ釣り。

解説

・『麻お撚繩にする解説』表紙の裏題は筆、内容は黒ボールペン、KOKUYO横書き四〇枚A四版に縦書きで記述。

〔引用文献〕

相川町史編纂委員会 一九八六 『佐渡相川の歴史』資料編八 民俗Ⅰ 新
潟県佐渡郡相川町

秋道智彌 一九九五 『海洋民族学 海のナチュラリストたち』東京大学出版会

池田哲夫 一九九〇 『イカ漁からみた佐渡の漁撈習俗』網野善彦ら編『海と列島文化』第一巻 小学館

池田哲夫 二〇〇四 『近代の漁撈技術と民俗』吉川弘文館

内田武志 一九七三 『星の方言と民俗』岩崎美術社

奥谷喬司ら 二〇〇〇 『食材魚貝大百科』第3巻 イカ・タコ類ほか+魚類 多紀保彦ら監修 平凡社

神田茂 一九七八 『日本文史料』下 原書房

北尾浩一 一九九八a 『天文民俗学試論(2)』『天界』5月号 東亜天文学会

北尾浩一 一九九八b 『天文民俗学試論(3)』『天界』6月号 東亜天文学会

北尾浩一 一九九八c 『天文民俗学試論(4)』『天界』7月号 東亜天文学会

北尾浩一 二〇〇一 『星と生きる 天文民俗学の試み』ウインズかもがわ

北尾浩一 二〇〇二 『星の語り部 天文民俗学の課題』ウインズかもがわ

北尾浩一 二〇〇六 『天文民俗学序説 星・人・暮らし』学術出版

北尾浩一 二〇一〇 『天文民俗調査報告(二〇〇九年)』大阪市立科学館

北尾浩一 二〇一〇 『天文民俗調査報告(二〇一〇年)』大阪市立科学館

北尾浩一 二〇一一 『天文民俗調査報告(二〇一一年)』大阪市立科学館

北尾浩一 二〇一二 『天文民俗調査報告(二〇一二年)』大阪市立科学館

北尾浩一 二〇一三 『天文民俗調査報告(二〇一三年)』大阪市立科学館

北尾浩一 二〇一四 『天文民俗調査報告(二〇一四年)』大阪市立科学館

- 研究報告』二二四
 北尾浩一 二〇一五 『天文民俗調査報告(二〇一四年)』『大阪市立科学館研究報告』二二五
 北尾浩一 二〇一六 『天文民俗調査報告(二〇一五年)』『大阪市立科学館研究報告』二二六
 北尾浩一 二〇一七 『天文民俗調査報告(二〇一六年)』『大阪市立科学館研究報告』二二七
 国史大系刊行会 一九三二『徳川実紀 新訂増補』国史大系刊行会
 後藤明 二〇一四『天文と人類学』『文化人類学』第七十九卷 第二号 日本文化人類学会
 後藤明 二〇一五『外伝・天文人類学』『南山考人』四十三号 南山考古文化人類学研究会
 齊藤国治 一九九二『古天文学の散歩道』恒星社
 齊藤国治 一九九七『小川清彦著作集 古天文・暦日の研究—天文学で解く歴史の謎—』皓星社
 洪沢敬三 一九一〇『日本釣漁技術史小考』角川書店
 新村出 一九二四『南蠻更紗』改造社
 杉山祐子 二〇一〇『知の生成する場・動き』としての在来知を描く』『日本文化人類学会第四十五回研究大会発表要旨集』日本文化人類学会
 土井清史 二〇一四『「サマタ」という星と漁具に関する一考察』『柏崎市立博物館報』第二十八号 柏崎市立博物館
 長島松平 一九一〇『実見佐渡島賊釣法』佐渡新聞社出版
 中野真備 二〇一六『天文民俗の研究』國學院大学文学部日本文学科卒業論文
 日本学士院日本科学史刊行会編 一九八六『明治前日本漁業技術史 資料編八』野間科学医学研究史料館
 農商務省水産局 一九一〇『日本水産捕採誌』

野尻抱影 一九七三『日本星名辞典』東京堂出版
 福島徹夫 一九七三『佐渡島イカ釣り漁法の史的考察』『佐渡史学』第九集
 佐渡史学会

Ellen, R. 2000. Introduction. In R. Ellen, P. Parkes and A. Bicker eds. Indigenous environmental knowledge and its transformations. Amsterdam, Harwood: 1-34. Ruggles, Clive L.N. and Nicholas J.Saunders. 1993 The Study of Cultural Astronomy. In Astronomies and Cultures. C.L.Ruggles and N.J. Saunders (eds), University Press of Colorado.